

平成16年度
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学FD委員会

無断転載を禁じます。

はじめに

本学の組織的・継続的なFD活動の歴史はまだ浅く、FDという言葉を用いての具体的な活動は平成11年度から学部を中心に主体的に行われてきました。平成14年4月には、全学的な見地からのFD活動が必要であることから、大学FD委員会を暫定的に立ち上げ、その意義や目的、役割を明確にし、各部の協力を得ながら各種の活動を行ってきました。そして、平成15年4月からは、大学FD委員会を正式な委員会として位置付け、より本格的に推進してまいりました。

いうまでもなく、本来FD活動は他者から強制されて取り組むべきものではなく、大学の教員であれば自発的に高度な教育研究を目指して、絶えず自己の能力の開発・向上に努めているべきものです。少子化の時代、大学間競争の時代、教育の質の保証の時代だからということではなく、常に特色のある、質の高い教育を学生に提供することが基本であることは、いまさら論を待たないことです。本学もこれまでに高い目標を掲げて教育の質の向上を図ってまいりましたが、FD活動を通して、全教員がより高いレベルの教育研究活動ができるよう支援していく所存です。活動の詳細は本文に譲りますが、平成15年度春学期から先生方、学生諸君の協力を得て、学生による授業評価をコア科目で実施することができました。この結果をもとに今後核心に迫った改革を進めていきたいと考えています。

大学FD委員会委員長
教学部長 後藤昌彦

目 次

I 大学FD活動状況と今後の計画

1. 大学FD委員会	
(1) 委員会の目的	1
(2) 委員構成	1
(3) 今年度の活動計画ならびに課題	1
(4) 活動状況	2
(5) 活動の成果	3
(6) 今後に向けて	3
2. 学部の活動.....	4

II 教員研修

1. プレゼンテーション研修	
(1) 実施の概要	16
(2) 研修プログラム内容	16
(3) 実施の状況	16
(4) 実施後のアンケートから	17
(5) ディスカッションの実施	20
(6) 実施の成果	29
(7) 平成16年度プレゼンテーション研修会参加者一覧	30
2. 新任教員研修	
(1) 研修プログラム内容	31
(2) 実施の成果	32

I 大学FD活動状況と今後の計画

1. 大学FD委員会

(1) 委員会の目的

本委員会は、大学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD活動を行う目的を以下のとおり明確化している。

- ① 玉川の教育理念を実現するため。
- ② 大学大衆化時代に対応するため。
- ③ 競争優位性を確保（受験生の大学選択等）するため。
- ④ 21世紀の玉川教育を支える教員の育成。

(2) 委員構成

委員等	所属	氏名
委員長	教学部長	後藤昌彦
副委員長	農学部	松香光夫
委員	文学部	藤田裕二
委員	工学部	山田博三
委員	経営学部	菊池重雄
委員	教育学部	長野正
委員	芸術学部	梶原新三
アドバイザー	学術研究所	切田節子
事務担当	教学部	稲葉興己
事務担当	教育調査企画部	齊藤文則

(3) 今年度の活動計画ならびに課題（平成15年度報告書「今後に向けて」より再掲）

- ・プレゼンテーション研修会の継続実施。
- ・新任教員研修会の継続実施。
- ・FDに関する各種研修への教員派遣実施。
- ・コア科目の「授業評価アンケート」の継続実施。
- ・外部講師による講演会の継続実施。
- ・FD活動の状況を本学ホームページに開設（平成16年度予定で検討）。

(4) 活動状況

主な活動内容としては以下のとおりである。特に、今年度は一年次教育の平成17年度全学実施に向けて、国際会議に教員を派遣、研修会の開催、教材の作成等を行った。また、学内教職員の意識を高めるために引き続き、学外講師による講演会を開催した。その内容は本報告書にも掲載している。さらに、コア科目の「学生による授業評価」を春・秋学期とも全学的に実施した。平成14年度から継続して行っているプレゼンテーション研修は本年度5回開催し、合計33名（今年度までの延べ受講者数130名、現在在職中で受講した専任教員は127名、全専任教員の46.5%）の教員が参加した。検討中のホームページについても、平成16年度に開設し、FD活動報告書を含めて活動の一端を学内外に公開した。

なお、大学FD委員会は本年度2回の開催であったが、その詳細については巻末に参考資料（議事要旨）として掲載している。

<平成16年度>

4月1日	大学FD講演会「これからの日本に求められる人材と教育機関に求められること」（桐村晋次氏）
4月9日	一年次教育パイロット授業勉強会
5月26日	第1回大学FD委員会
6月14～17日	一年次教育「ハワイ国際会議」教員派遣
6月25日	一年次教育パイロット授業勉強会
7月9～15日	春学期コア科目の「学生による授業評価」アンケート実施①
7月16日	一年次教育パイロット授業担当者会
8月3～4日	平成16年度第1回プレゼンテーション研修
8月10～11日	平成16年度第2回プレゼンテーション研修
9月8～9日	平成16年度第3回プレゼンテーション研修
9月14日	本学ホームページに「大学FD活動」を開設
9月16日・22日	一年次教育パイロット授業勉強会
12月14日	大学FD講演会「一年次教育の意義と方法」（山田礼子氏）
1月11～17日	秋学期コア科目の「学生による授業評価」アンケート実施②
2月22～23日	平成17年度採用の新任教員研修会
2月28日	一年次教育ワークショップ
1月25日	第2回大学FD委員会
3月2～3日	平成16年度第4回プレゼンテーション研修
3月5～6日	大学コンソーシアム京都「第10回FDフォーラム」教職員派遣
3月9～10日	平成16年度第5回プレゼンテーション研修
3月10日	一年次教育ワークショップ

(5) 活動の成果

大学FD講演会は全専任教員対象に今年度で2回目の開催となった。人材育成の重要性、社会人に必要な基礎能力、教育機関に求められていること、私立大学に期待されていることなどが再認識できた。

今年度のプレゼンテーション研修は、特にディスカッション内容が充実し、これらを通じて教員間に相互理解が深まり、FD活動への意欲も向上した。さらに、改善への提案に結びつくような具体的な意見が出てきたことが成果としてあげられる。

コア科目における「授業評価アンケート」は今年度も2回実施し、昨年度からは各 Semester で計4回実施したことになる。授業毎の集計結果及び記述式アンケートは各授業担当者にフィードバックしているが、今年度から全体及び分野集計の平均値を学内のみ対象にホームページで公表した。

新任教員研修会では開催後のアンケートにおいて、「研修内容が充実していた」、「教材が分かりやすかった」、「講師の説明がわかりやすかった」など100%の回答を得たことから、本研修会の目的を達成できたと評価できる。

一年次教育については、平成17年度全学導入の準備段階にあり、そのためのパイロット授業やワークショップ等を実施したことが大きな役割を果たしている。

(6) 今後に向けて

昨年度の報告書に記載のとおり、今年度の大学FD講演会、新任教員研修会は本学の研修センター主催の形式で開催した。今後は、プレゼンテーション研修も同様の形で運営したいと考えている。

また、これまでに大学FD講演会は、年度初めに1回のみ開催してきたが、内容もさることながら啓蒙活動の意味も含めて、平成17年度以降は年に複数回の開催ができるよう再度研修センターと調整を図りながら検討をしたい。さらに、教員相互の授業参観や研究会が全学的に開催されていないため、平成17年度の秋学期から開催できるよう検討をしていきたい。

2. 学部の活動

平成16年度における各学部FD活動の状況を一覧にする。

	各学部会の 構成人数	各学部会の 開催回数	学生による授業評価の実施		プレゼンテーション 研修会への 参加者数
			実施回数	教員の参加率	
文学部	4名	1回	1回	81%	10名
農学部	6名	2回 (メール)	2回	100%	7名
工学部	5名	5回	2回	春セメ 66% 秋セメ 84%	10名
経営学部	23名 (全員)	6回	2回	100%	5名
教育学部	39名	3回	—	—	3名
芸術学部	9名	3回	2回	100%	4名
コア科目			2回	100%	

※教員の参加率の算出には、専任・非常勤を含める。

※文学部において国際言語文化学科及びリベラルアーツ学科は教員の参加率が100%となっている。

各学部専任教員におけるプレゼンテーション研修の受講修了状況（平成16年度現在）

	16年度専任教員数（A）	Aの中で受講した人数	割合
文学部	79名	38名	48.1%
農学部	42名	24名	57.1%
工学部	66名	21名	31.8%
経営学部	22名	18名	81.8%
教育学部	34名	12名	35.3%
芸術学部	30名	14名	46.7%
合計	273名	127名	46.5%

※専任教員は助手以上で、平成16年5月1日現在の専任教員数。

■各学部における今後（平成17年度～）の計画等について、一覧にまとめる。

	今後の計画
文学部	<ul style="list-style-type: none"> ・授業実践報告会の開催。特に人間学科、リベラルアーツ学科の教員の参加を促す。 ・学外でのFD関連の研修会に積極的に教員を派遣する。 ・人間学科では、これまでの取り組みを土台に、特に来年度新規開講科目についてはその成果を踏まえてさらに検討を深める。 ・リベラルアーツ学科では、FD研修会の開催など教員の資質向上を図る機会を積極的に設けていく。 ・国際言語文化学科では、学生による授業アンケートの対象や質問形式を変えるなど、新たな形のアンケートを検討する。
農学部	<ul style="list-style-type: none"> ・シラバス共通化とその改善を行う。 ・Blackboard システムの活用を勧める。 ・ホームページなどを活用して、FD活動が第三者評価対象としても見えるようにする。
工学部	<p>(1) 学生によるアンケートに関する検討を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全学科 ISO9001 認証に向けて、迅速な集計体制の確立（外注を含む）。 ・アンケートフォームの統一：学部内学科間、コア科目、他学部。 ・開示方法：WWW(学外・学内)と紙・製本の使い分け。 <p>(2) 工学教育の事例研究と導入教育への反映させる。</p>
経営学部	<ul style="list-style-type: none"> ・授業内容・方法に関する研究（継続）を行う。 ・教員研修会の開催（継続）を行う。 ・専門科目共同授業に関する研究（継続）を行う。 ・リメディアル教育に関する研究（継続）を行う。 ・一年次教育に関する研究（継続）を行う。 ・学生確保に関する研究を行う。
教育学部	<p>本学部の教員ひとり一人が公共的役割や社会的責任の自覚を高め、学部の知的資産（知識・方法）の活用と発展・更新を図り、教育・保育専門職業人養成、幅広い職業人養成および、生涯学習機能や社会貢献機能（地域貢献、産学官連携、国際交流）などの役割を担える学部の形成を進めるためにFD活動を位置付け推進する。</p>
芸術学部	<p>海外提携校との夏期講習など授業メニューの新設、教員招聘による授業の評価公開等プランを練り始めている。これらは、教員と学生両サイドから教育効果を上げることを目指し、受講の満足度を上げることを目標とする。</p>

§ 文学部

(1) FD活動への取り組み理念・目標

限られた教員のみが活動を担うのではなく、全員が何らかの形でFD活動に参加できるような体制を構築する。

(2) 学部におけるFD活動の組織体制

文学部長を交え、文学部3学科（人間学科、リベラルアーツ学科、国際言語文化学科）の合同FD委員会を開催している。また学科ごとに、学科運営委員会あるいは授業運営委員会を設置し、学科、授業運営に関わる様々な事項を審議し、FD活動の企画、運営に当たっている。

(3) 16年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目や課題の改善など、その進捗状況及び成果

FD研修会の開催、学生による授業評価の実施、「プロジェクトセミナー」（リベラルアーツ学科）を始めとする授業の運営方法の検討等を行ない、それぞれに成果をあげることができた。

② 学生による授業評価への取り組み及びその結果の活用

人間学科では、学科の教員各自がそれぞれの授業形態と内容に即して検討し、適宜、レポートへのコメント、課題の設定などを通じて学生にフィードバックしている。

リベラルアーツ学科では、学期終了時に、学科所属の全学生を対象に、アンケート調査を実施した。その調査内容は、全般的な時間割の組み方、教員の授業の進め方、学生自身の授業への取り組み方（自己評価）、授業への要望等である。これらに対する回答を分析し、今後の授業運営やカリキュラム作成の参考にした。

国際言語文化学科では、昨年に続き第3回目のアンケート調査を7月上旬に行った。アンケート結果は授業ごとに担当教員に知らせると同時に、6つのカテゴリについて授業運営委員会で検討した。昨年に比べ、言語ごとの評価の落差が縮まり、全体として評価が上がったという分析結果が得られた。アンケート結果は本学のホームページに掲載した。

③ 研修活動の組織的な取り組み

人間学科では、高等教育研究開発センター主催「大学教育研究フォーラム」への参加があった。

リベラルアーツ学科では、教育研究活動の改善へ向けて、日頃から学科全体で取り組んだ。年度末には、学外施設において集中的に、全教員が参加してFD研修会を実施した。この研修会では、まず、教育機関の広報を専門とする会社の社長を講師に招き、「外から見た大学の役割：人材育成の観点から」と題する講演会を実施し、講演後

全体で討論した。次に、本学科発足後 2 年間の教育活動を踏まえて、今後へ向けたカリキュラムの改善などについて検討した。

④ その他の取り組み

10月に「文学部FD活動としての授業実践報告会」を開催し、特に国際言語文化学科の4人の教員による「ブラックボードを利用した授業研究例」の報告が行われた。参加者約15名で刺激的な報告会であった。

人間学科では、学年指定の必修、複数の教員による開講科目である、「名著講読」(2年次)の成績評価の検討、「人間学基礎ゼミⅠ・Ⅱ」(1年次)および「人間学演習Ⅰ・Ⅱ」(3年次)の運営と評価に関する検討、「人間学演習Ⅲ・Ⅳ」(4年次:17年度より開講)におけるクラス運営の検討について、評価する側からの問題の見直しを含めて検討した。

(4) 今後の予定や課題

来年度も授業実践報告会を開催し、特に人間学科、リベラルアーツ学科の教員の参加を促していきたい。

特に学外でのFD関連の研修会により積極的に教員を派遣していきたい。

人間学科では、基本的にはこれまでと同様の枠組みで続ける。さらに、これまでの取り組みを土台に、特に来年度新規開講科目についてはその成果を踏まえてさらに検討を深める。

リベラルアーツ学科では、17年度は学科設置後3年目を迎えることとなり、ゼミの運営、学生の卒業後のキャリアデザインへ向けた指導、学科完成後の教育課程の作成など新たな課題が生ずる。それらの活動が適切に行われるよう、17年度も、FD研修会の開催など教員の資質向上を図る機会を積極的に設けていきたい。

国際言語文化学科では、学生による授業アンケートが定着しているが来年度は対象や質問形式を変えるなど、新たな形のアンケートを検討してみたい。

§ 農学部

(1) F D活動への取り組み理念・目標

- ①全学F D委員会と協調しながら、プレゼンテーション研修会などに参加し、また、専任教員は原則として全員が学生による授業評価を行う。(全科目でなくてもよい) これらを通じて、教員の教育技能開発を進める。
- ②若手教員の学位取得に結びつく活動を技能開発と捉え、援助・助成する。

(2) 学部におけるF D活動の組織体制

大学F D委員(松香)、農学研究科長(佐々木)、生物資源学科2名(露木、小野)、応用生物化学科2名(堀、八並)計6名から構成する。

(3) 16年度の活動内容

- ① 前年度からの実施予定項目や課題の改善など、その進捗状況及び成果
 - ・専任教員は原則として全員が学生による授業評価を行った(下記②)。
 - ・プレゼンテーション研修会への参加(下記③)。
- ② 学生による授業評価への取り組み及びその結果の活用
 - ・コア科目以外に学部長の方針により、全教員の協力を求め、農学部科目について、春 Semester 32名(43科目)、秋 Semester 29名(40科目)で実施した。
 - ・集計結果を1年分まとめて冊子とし、閲覧できるようにする予定である。
- ③ 研修活動の組織的な取り組み

プレゼンテーション研修会の参加率が他学部よりも高くなったので、今年度は5回の機会にそれぞれ1~2名、計7名が参加した。
- ④ その他の取り組み
 - ・学位取得を目ざす若手教員の支援をしている。次年度取得予定者が1名。
 - ・新学科増設を機会に基礎科目等のシラバスの共通化及びカリキュラム構造などを検討した。

(4) 今後の予定や課題

- ・シラバス共通化とその改善。
- ・Blackboard システムの活用を勧める。
- ・ホームページなどを活用して、F D活動が第三者評価対象としても見えるようにする。

§ 工学部

(1) F D活動への取り組み理念・目標

「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という工学部宣言を具現化するために、教育内容や教育環境の向上をはかる。

(2) 学部におけるF D活動の組織体制

- ・工学部自己点検委員会。各学科から各1名+担当主任、計5名で構成。
- ・全教員参加による工学部F D研修会を年1回開催。

(3) 16年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目や課題の改善など、その進捗状況及び成果

平成14年度から実施してきた学生による授業評価は、本年度秋セメから全教員、全科目に拡大した。詳細は②に記述する。

② 学生による授業評価への取り組み及びその結果の活用

- ・対象教科：非常勤教員による科目、実験、卒業研究を含む全教科（12名以下の少人数科目を除く）。卒業研究等は学科単位で集計する。
- ・開示方法：各教員には全体の集計結果と個人の科目別データ。全体の集計結果と掲載を希望する教員のみ科目別集計結果の冊子作成。学外Webには全体の集計結果公開。学内Webに全情報を公開（科目別集計シートにおいて教員名は除く。科目担当情報により間接対応可能）。
- ・対象学科：マネジメントシステム学科はISO9001対応の為別フォームによる集計。
- ・結果の活用：各教員の授業改善に反映する。工学部としてBest Teacher's賞、教育業績評価（昇格審査、予算）に反映することを計画している。

③ 研修活動の組織的な取り組み

全学F D委員会で計画されたプレゼンテーション研修会に各学科から参加した。

④ その他の取り組み

工学部F D研修会を3月24日に実施

- ・個人情報の取り扱いについて：南情報システムメディアセンター長。
- ・工学部入試状況と将来構想：似内工学部長。
- ・工学部自己点検委員会報告：春日委員長。
- ・技術教育第三者評価委員会（JABEE）活動状況：中村教授、小林主任。

(4) 今後の予定や課題

(1) 学生によるアンケートに関する検討

- ・全学科ISO9001認証に向けて、迅速な集計体制の確立（外注を含む）。
- ・アンケートフォームの統一：学内学科間、コア科目、他学部。
- ・開示方法：WWW(学外・学内)と紙・製本の使い分け。

(2) 工学教育の事例研究と導入教育への反映

§ 経営学部

(1) F D活動への取り組み理念・目標

- ① 質の高い卒業生（経営学部のミッション・ステートメントを体現し得る卒業生）の輩出。
- ② リベラルアーツを基盤とした経営学教育の実現。
- ③ 21世紀社会に生き残ることのできる経営学部—少子化時代・大学全入時代にあって、運営を維持しうる体力をもった学部の形成。
- ④ 玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部の形成。

(2) 学部におけるF D活動の組織体

- ① 学部の専任教員全員が参加するF D会議（隔月1回）、教育研究会および研究発表会の形式で開催。
- ② 経営学部教員研修会（春学期1回：専任教員のみで開催、秋学期1回：専任教員および非常勤教員で開催）。

(3) 16年度の活動内容

- ① 前年度からの実施予定項目や課題の改善など、その進捗状況及び成果
 - ・ 学生による授業評価の実施と公開（その詳細は②に記述する）。
 - ・ 一年次教育実施へ向けてのミーティングの開催。
 - 全学科目「一年次セミナー101・102」として平成17年度より実施。
 - ・ 「特別研究I～IV（ゼミナール）」の見直し—平成17年度より「プロジェクト・セミナーI～IV」として実施。
- ② 学生による授業評価への取り組み及びその結果の活用

春学期、秋学期ともに全専任教員、全非常勤教員が実施—漸次「経営学部オフィシャル・ホームページ」で公開予定（現在は平成15年データを公開中）。平成17年度の経営学部F D会議でアンケート項目および実施方法についての再確認を行う予定。
- ③ 研修活動の組織的な取り組み
 - 〈経営学部F D会議〉
 - ・ 研究報告。
 - ・ 一年次教育の実施に向けて。
 - ・ 学外F D研修会参加報告。
 - 〈経営学部教員研修会〉
 - ・ 第3回教員研修会（8月実施）—教職免許状課程設置に向けて、第17回国際FYE会議参加報告、経営学部の新カリキュラム等。
 - ・ 第4回教員研修会（3月実施）—経営学部:過去4年間の総括、経営学部の出口戦略、第三者評価への対応、高等学校における教育内容の変化等。

④ その他の取り組み

- ・リメディアル教育（AO入試合格者および指定校推薦入試合格者対象）の実施。
- ・第4回英語科目担当非常勤教員研修会の開催。
- ・就職指導検討会の開催。
- ・インターンシップ検討会の開催。
- ・経営学部新カリキュラム検討会の開催。

（4）今後の予定や課題

- ①授業内容・方法に関する研究（継続）。
- ②教員研修会の開催（継続）。
- ③専門科目共同授業に関する研究（継続）。
- ④リメディアル教育に関する研究（継続）。
- ⑤一年次教育に関する研究（継続）。
- ⑥学生確保に関する研究。

§ 教育学部

(1) F D活動への取り組み理念・目標

本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェッショナルの育成を目指している。そして、教員は人材育成の目標を実現できる資質と能力を向上させ、社会に貢献できる人材育成を行うことを通して、学部の競争優位性を高めることが教育学部F D活動の目標である。

(2) 学部におけるF D活動の組織体制

教育学部長、学科主任、教務主任、学生主任、教務・教職担当で組織する。

(3) 16年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目や課題の改善など、その進捗状況及び成果

本学部では社会が求める人材の育成を通して社会に貢献し、学部の競争優位性を高めることをF D活動の目標として掲げているが、全教員が担当する教育実習・保育実習などの訪問指導や研究授業の学校訪問の機会を単に学生指導にとどめるのではなく、訪問校、園などの学校長や園長、施設長など学校責任者との面談を通して、教育現場の現状や社会的要請と教育の成果や改善すべき点等を調査する機会と位置付けている。なお、平成16年度はのべ190人の教員が上記の機会を通じて面談をおこなった。さらに、協議会において教育長・学校長・園長・施設長など136人から本学部に対する意見・要望を聞くことを通して、F Dと人材育成に反映させようとしている。その結果を踏まえて16年度はコミュニケーション能力の低下や自然体験の不足を補完するものとして、のべ21人の教員が学生と共に参加した野外教育研修やtap研修(教員14名参加)などのプログラムを教育計画に組み込み実行した。また、コスモス祭を表現力・創造力・実行力・伝達力などの育成を図る教育機会として捉え、学部全体で組織的に取り組むなど、F D活動が教育活動に反映され、教員と学生が共に育つ共有の成果として現れるように実践した。

② 学生による授業評価への取り組み及びその結果の活用

教育実習終了後にディスカッション形式の学生懇談会を実施し、本学部で学んだことが現場でどのような形で生かされたのか、また教育内容や方法の改善点はどのようなどころにあるのかを聞き取りした。この結果を踏まえて、授業評価の目的が教員と学生が共有出来る授業評価案を検討している。

③ 研修活動の組織的な取り組み

- ・平成16年度は17年度から開始される1年次教育に関する研修を主な題材にして、「答申・我が国の高等教育の将来像」を踏まえ、知識基盤社会における知的活動と創造力を支える基礎力の充実を図るために求められる教員の資質と能力についての研修を、1年次担任およびF D委員を中心に一泊二日で実施した。
- ・教員の資質と能力が、教職に対する愛着、誇り、などの一体感に支えられた知識、

技能等の総体であることを、学部長をはじめFD委員が中心となり各種の会議等で発言しFD活動基盤の意識化をすすめた。

- ・他大学における教育活動の内容を調査し、本学部の将来構想や各教員の資質と能力の向上を図るようにした。

④ その他の取り組み

- ・教職研究室を教育学部校舎内に移転し、学生とのコミュニケーションを図りやすい環境に整備した。
- ・教職研究室に隣接して学生自習室を設け、教員採用試験対策図書を常備して学生の学ぶ意欲に応えるようにした。

(4) 今後の予定や課題

本学部の教員ひとり一人が公共的役割や社会的責任の自覚を高め、学部の知的資産（知識・方法）の活用と発展・更新を図り、教育・保育専門職業人養成、幅広い職業人養成および、生涯学習機能や社会貢献機能（地域貢献、産学官連携、国際交流）などの役割を担える学部の形成を進めるためにFD活動を位置付け推進する。

§ 芸術学部

(1) F D活動への取り組み理念・目標

芸術学部が掲げる「社会貢献のできる人材育成」という目標を達成する一手段として、教員間で教育上有効な複数キーワードを共有する。教員同志が教育方法を示唆し、研究しあうことが学生への教育還元ばかりか教員自身の能力向上に繋がることを理念とする。

(2) 学部におけるF D活動の組織体制

芸術学部長、パフォーマンス・アーツ学科主任、ビジュアル・アーツ学科主任、学部F D委員と教務主任及び担当を主軸に、海外及び外部招聘校教員等の第三者を組み込む場合がある。

(3) 16年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目や課題の改善など、その進捗状況及び成果

パフォーマンス・アーツ学科では、スワースモア大学から玉川大学芸術学部にはない音楽教育内容とその評価法を研究するべく教員招聘の運動・コロンビア大学からブラッドガートン教授を招聘し、授業改善の1つとしてPCによる音響プログラムと自動演奏を中心とした音楽教育の講演会を開催。

ビジュアル・アーツ学科では、平成14年度招聘したロンドン大学ゴールドスミスカレッジ教授リチャードキンブル氏の再招聘を計画し、前回提示された評価の具体化を確認する計画の運動。加えて遠隔教育やアーティストインレジデンス等教育交換計画の実現化への働き。

② 学生による授業評価への取り組み及びその結果の活用

芸術学部専門科目の学生による授業評価をWebにより各 Semester 授業終了時に実施。未だ、参加率の低い学生に対し評価への参加をどのように促しているか、学生の評価を教員への良い刺激にする方法等討議している。また、芸術学部独自で、入学生の就学目標を明確化するために教務テストを実施し、学生各自のファイルに保存され、それらデータは担任の指導効果を高めている。

③ 研修活動の組織的な取り組み

芸術学部共同研究としては、海外の大学、教育・研究施設を訪問し、教育目標の内容とその実践及び評価方法が社会的評価となり得ていることの実地研修を継続する。芸術学部独自に基礎能力調査を実施し、将来卒業資格化する計画である。また、2年次S P I 試験 (Synthetic Personality Inventory)、3年次R - C A P 受験 (RECRUIT Career Assessment Program) など早期に対社会、対就職を目標に特別研修を実施している。

④ その他の取り組み

2年前から教員の授業における課題作成や情報提供としてブラックボードを活用している。芸術学部独自には各学年別フォーラムを開設し、教員と学生間の意見交換を目指している。

(4) 今後の予定や課題

海外提携校との夏期講習など授業メニューの新設、教員招聘による授業の評価公開等プランを練り始めている。これらは、教員と学生両サイドから教育効果を上げることを目指し、受講の満足度を上げることを目標とする。

Ⅱ 教員研修

1. プレゼンテーション研修

(1) 実施の概要

平成14年から始まった当該研修も3年目に入った。研修会の運営などは、2年目である昨年度にすでに軌道に乗っていたが、3年目はより内容を充実させることができ、全体の満足度も向上した。また昨年からはじめたディスカッションは、より深い内容が話し合われた。学部、学科を越えた話し合いを通じて、FD活動についての共通理解を得ることができ、今後のFD活動を継続していくための基盤作りに役立ったと思う。

本年度も昨年同様、夏休みに3回、春休みに2回、合計5回のクラスを実施し、合計参加者数は33名であった。3年間の参加延べ人数は130名で、専任教員の約半数が受講されたことになる。受講された方々からは、“全員が受講するべきである”、“研修要員を増やして、研修環境をより強化するべきである”といった励ましの声が増えてきた。今後も同じような時期と人数で、研修会を継続していくつもりである。

(2) 研修プログラム内容

2日間、朝9時から17時までの日程で、以下に示すように演習が中心である。特記すべきことは、ビデオを使った演習方法と、他の参加者による評価である。ビデオで客観的に教壇での自分の姿を観察することや、同僚である教員を前に模擬授業を行い、評価されるということは、大学という場ではなかなか経験できないことであり、それだけ成果も大きい。

第1日目	第2日目
第1章：プレゼンテーションの基本 第2章：視聴覚教材の使い方	第3章：質疑応答の技法 演習3：基本的な技法の演習 演習4：ディスカッション
演習1：模擬授業 プレゼンテーション（1） 演習2：改善点の明確化 ビデオ視聴による改善作業	演習5：模擬授業 プレゼンテーション（2） 第4章：まとめ 演習6：アクション・プラン作成

(3) 実施の状況

開催の日程、参加人数、開催場所は、以下のとおりである。各クラスの参加者詳細は「参加一覧」参照のこと。

- ・第1回： 8月03日（水）～04日（木） 7名 経営学部校舎204
- ・第2回： 8月10日（水）～11日（木） 8名 経営学部校舎204
- ・第3回： 9月08日（木）～09日（金） 6名 経営学部校舎204

- ・第4回： 3月02日（木）～03日（金） 7名 経営学部校舎 204
- ・第5回： 3月09日（木）～10日（金） 5名 経営学部校舎 204

（４）実施後のアンケートから

アンケート項目は、継続的に変化を捉えるために、1年目から同じである。項目ごとにA～Eまでチェックするものとフリーコメントの両方からなる。

（４）－１ チェック項目の集計結果

以下は、チェック項目の結果である。「#」はクラス番号で、その列の第6行、「計」（網掛け行）は5クラス分の合計である。「点」はA=5、B=4、C=3、D=2、E=1として平均を出したものである。

参考のため、過去2年の平均を最終行に載せた。軌道にのった昨年度と比較するとほとんど数字の変化はない。数字によるアンケートは、ほぼ安定したと考えることができる。

① 全体について

総合満足度								授業に役立つか								スキルは向上したか							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	5	1	1			7	4.6	1	4	2	1			7	4.4	1	0	5	2			7	3.7
2	8					8	5.0	2	8	0				8	5.0	2	2	6				8	4.2
3	5	1				6	4.8	3	6	0				6	5.0	3	4	2	1			6	4.7
4	6	1				7	4.9	4	6	1				7	4.9	4	2	4				7	4.1
5	5					5	5.0	5	4	1				5	4.8	5	2	3		0		5	4.4
計	29	3	1	0	0	33	4.8	計	28	4	1	0	0	37	4.8	計	10	21	3	0	0	33	4.2
2003	34	3	1	0	0	38	4.9	2003	32	4	1	0	0	37	4.8	2003	12	22	2	1	0	37	4.2
2002	41	15	2	1	0	59	4.6	2002	43	14	2	0	0	59	4.7	2002	10	38	6	4	0	58	3.9

② 研修会の質について

講習内容								講師								テキスト、教材、教具							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	5	2				7	4.7	1	6	1				7	4.9	1	6	1				7	4.9
2	7	1				8	4.9	2	8					8	5.0	2	8					8	5.0
3	6					6	5.0	3	6					6	5.0	3	6					6	5.0
4	7					7	5.0	4	7					7	5.0	4	6	1				7	4.7
5	2	3				5	4.4	5	5					5	5.0	5	3	2				5	4.7
計	27	6	0	0	0	33	4.8	計	32	1	0	0	0	33	5.0	計	29	4	0	0	0	33	4.7
2003	26	10	1	1	0	38	4.6	2003	35	3	0	0	0	38	4.9	2003	31	5	1	0	0	37	4.8
2002	36	17	3	2	0	58	4.5	2002	51	6	1	0	0	58	4.9	2002	40	17	2	0	0	59	4.6

③ 研修会の運営について

日程							時間配分								
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	4	2	1			7	4.4	1	6	1				7	4.9
2	8					8	5.0	2	8					8	5.0
3	6					6	5.0	3	6					6	5.0
4	5	2				7	4.7	4	5	2				7	4.7
5	1	4				5	4.2	5	1	3	1			5	4.0
計	24	8	1	0	0	33	4.7	計	26	6	1	0	0	33	4.8
2003	24	9	5	0	0	38	4.5	2003	31	6	1	0	0	38	4.8
2002	28	19	3	5	3	58	4.1	2002	40	16	2	1	0	59	4.6

日程が、0.2ポイント向上した。向上率はわずかであるが、2日間が適切であるということへの理解が深まったと考えられる。

④ 場所および事務連絡について

開催場所							事務処理・連絡								
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	5	2				7	4.7	1	5	2				7	4.7
2	6	2				8	4.8	2	7	1				8	4.9
3	4	1				5	4.8	3	5		1			6	4.7
4	6	1				7	4.9	4	5	2				7	4.7
5	3	1	1			5	4.4	5		4	1			5	3.8
計	24	7	1	0	0	32	4.7	計	22	9	2	0	0	33	4.6
2003	22	12	2	1	0	37	4.5	2003	16	16	1	2	1	36	4.2
2002	17	24	6	6	0	59	3.6	2002	14	20	15	7	2	58	3.6

事務処理に関するポイントが、昨年度に引き続き向上した。初年度に比べると1ポイントも向上している。事前の案内など、受講者が必要と感じる書類をメールで早めに送信したことがよかったと思う。

⑤ 研修会の開催について

研修を継続すべきか							他の人に参加を勧めるか								
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	5	1	1			7	4.6	1	5	2				7	4.7
2	8					8	5.0	2	8					8	5.0
3	5	1				6	4.8	3	6					6	5.0
4	5	2				7	4.7	4	6	1				7	4.9
5	4	1				5	4.8	5	4	1				5	4.8
計	27	5	1	0	0	33	4.8	計	29	4	0	0	0	33	4.9
2003	33	4	0	1	0	38	4.8	2003	34	2	1	0	0	37	4.9
2002	46	9	2	2	0	59	4.7	2002	41	14	2	2	0	59	4.6

(4) - 2 フリーコメント概要

前述のように、項目別の数字によるポイントはすでに安定しており、改善項目を洗い出すという点では意味をなさない。もちろん、さらに変化する可能性があるので、今後も数字によるアンケートは継続する。

こうした場合、ますますフリーコメントの重要性が増すことになる。集計には労力を要するが、この中に含まれている多くのメッセージから、改善項目を読み取って、より役に立つ研修を提供していきたいと考える。

フリーコメント全ての集計を記載することはスペースの関係で省略するが、主だった項目ごとのコメントを、抜粋して記載する。

■「有用性」については、研修が役立つというコメントが目立つ。以下に、特に多かったコメントをあげてみる。(括弧内は件数)

授業の改善に役立つ有意義な研修であった	(11件)
自分を見直すよい機会を得た	(6件)
自分自身をビデオで客観的に見たことが有効だった	(4件)
他学部の教員同士の交流が図れたことがよかった	(3件)
自分の改善点を認識し、改善課題が明確になった	(3件)
他学部の教員の模擬授業が役立った	(2件)

その他、「参加できたことに感謝する」「今後、授業改善に取り組んでいきたい」、「新しいことに取り組む動機づけになった」といった前向きな感想が目立つ。

■「運営」に関するコメントは昨年同様、概ね好意的なものであった。特に人数に関しては、5～6名程度が適切であると明示的に書かれている(2件)ものもあり、今後も10名以下という制限は守っていききたいと思う。

過去には時間管理が厳しすぎる、という意見があったが、今年は“もっと厳しい運営を”という反対意見が出てきた(2件)。これも少人数にした効果が出てきたのだと思う。来年度はこうした側面からも改訂していく必要があると感じている。

昨年までなかったコメントで出てきたのは、講師を複数にするなどして、運営体制を整えるべきである(4件)という意見である。これは、講師一人で運営しているために不備がある、という意味ではなく、長く継続していくための体制作りという積極的な意味で書かれたコメントである。今後、FD委員会で検討していく必要がある項目だと感じている。

■「内容」では、“ディスカッションの時間がよかった”というコメントが最も多く(4件)、「有用性」での“他学部の教員同士の交流がよかった”(3件)と合わせると、FD活動の基盤である教員同士の情報交換ができたことが、評価されていることがわかる。

今年度になって出てきたコメントは、以下のように当該コースをさらに発展した研修会にと希望するものである。前向きなコメントとして、実施の方向づけをしていきたいと感じる。

当コースの継続編が必要である	(4件)
----------------	------

学部、学科に特化したプレゼンテーション研修を望む (3件)

通常の授業(学生対象、50分)での研修を望む (2件)

■「開催場所」については、昨年度に引き続いて経営学部 204 教室で実施している。特に悪いコメントは目立たないが、空調が悪いという具体的な意見が出てきた。実際、夏は冷えすぎるので頻繁に調節が必要であり、冬は足元が寒く頭部が暑くなるという不具合がある。しかし、全体として考えるとこの研修には適している教室だと思う。

■「日程」については、項目別数字にも表れているように、“2 日間は適切である”(3件)というコメントがあり、2 日間が定着してきたと考えることができる。

昨年のように“2 日間では短すぎる”という意見はなかった。“1.5 日にしてほしい”(1件)という意見はあったが、1.5 日という中途半端な日数はかえって運営がしにくくなるので、やはり2日にしていきたい。また、“2日連続でなく間隔をおくほうがよい”(2件)という意見もあったが、間をあけて同じメンバーを集めることには無理があるので、この意見も不採用としたい。

■「参加形態」については、“1 回限りではなく継続的に時期をおいて参加し、スキルアップを図るべきである”(5件)が最も多く、一度参加してそれで終わりにしたくない、という熱意が感じられる。「内容」の項で挙げたコメントにもあるように、当該研修会だけで終わらせてはいけないと痛感した。

“全員受講するべき”(4件)という意見が多く、“全員受講の必要はない”(1件)に比べると、例外はあるにしてもほぼ全員が受講されることを目標にしていかなければいけないと感じている。

■「事務連絡」についても、数字の結果にも表れているように悪いコメントは少なくなった。今回多かったのは、実施しているときに“事務のサポートが少ない”(4件)というものである。お茶や飴などのサービスを講師がしていることに対する意見だと思うが、慣れの問題だと思う。

(5) ディスカッションの実施

昨年に引き続き、2 日目の午前中にディスカッションの時間をとった。昨年との違いは、最初に玉川大学におけるFD活動について説明をしたことである。昨年は、あくまで「プレゼンテーション研修」の一部としてディスカッションを位置づけていたが、実際に話し合ってみると、“プレゼンテーション”にとどまらず“FD活動全体”に広がった。そこで、今年は、最初から“FD活動全体についての話し合い”という位置づけにした。

学部・学科という壁を越え、また利害関係のない仲間が本音でフリーディスカッションをしたことによって、単に円滑なコミュニケーションが図れた、ということだけでなく、FDに関する共通理解を図ることができたと思う。また、FD活動について共感しあって築いた

人間関係が、これからのFD活動を学部・学科を越えて広げていくための原動力となると感じている。ここで出されたご意見は、積極的かつ建設的なものばかりであり、今後のFD活動の幅を広げるための参考になると思う。是非、FD委員会でこれらの意見を検証して、実施可能なことは実施の方向に進めていきたいと思う。

ディスカッションで出た意見を、クラス別に以下に列挙する。5クラス分を統合せずにクラス別にするのは、フリー・ディスカッションの形式にしたため、出てきたテーマがクラス別に異なるからである。また、なるべく生の声が聞えるように、抜粋したりまとめたりしないで、単に内容別に分類するだけにとどめて記述する。

第1回(8/3~4)

メンバー：山口修二、青木さゆり、飛田有支、大久保英敏、中村眞次、
所伸之、小山正(名簿順、敬称略)

★FD活動について

理想のFD活動にする方法

- ・学部を横断するような組織で、理想的な学科をつくらないと無理である
- ・意欲のある人が集まって、テスト的に理想的な学科をつくとよい

FD活動を阻害する要因

- ・教員の仕事が非常に増えている
- ・従来、事務がしていた仕事を教員がしている
- ・現状では事務のアルバイトを雇うことができない
- ・何でもやりっぱなしになることが多いという風土を変える必要がある
- ・意欲のある人がボランティアで実施している状態は続かない
- ・助手、研修員の整備が必要である
- ・秘書、アルバイトなどを雇えない環境はおかしい
- ・ディスカッションの意見が反映されないと困る

★学生によるアンケートについて

アンケートの意味について

- ・工学部がはじめたときには、それなりの目的も意味もあった
- ・最近形式だけになり、意味がなくなってしまった
- ・結果が同じになるなら、やらないほうがよい
- ・次のステップがなければだめ(福井大学の例)
- ・第三者評価のために、(たとえ形式的であっても)学生評価が必要になる

アンケートの事務処理について

- ・集計をボランティアでやっている科がある(LA)
- ・国際言語文化学科などは48万円の予算がついている

アンケートのやり方について

- ・学生にとっては、同じ質問を何度も書かされるのでマンネリになる
- ・あまり考えずに書くようになる
- ・試験前の重要な時期と重なる
- ・教員にとっても、試験前の重要な時期である

★授業改善について

授業改善の方法

- ・授業は、科目や人数によって異なるので、それなりの方法で改善する必要がある
- ・人数別（30人以下、30人～80人、それ以上）の授業方法改善が必要である
- ・プレゼンテーション以外のテクニックの研修も必要である

授業の効率化

- ・授業の効率化を考えなければならない（一部を Web にする、一部を TA がするなど）
- ・力仕事の部分を、アルバイトにしてもらうなどを考えるとよい
- ・予習・復習の必要性を言うならば、それをフォローする必要がある
- ・チューター制で、学生の予習・復習をカバーするような仕組みがあるとよい

授業改善と I T

- ・Blackboard によって、新たな工夫が可能である
- ・黒（白）板しか使えないような設備はまだ多い
- ・新しい機器を使用したくても、できない教室がある
- ・必ずしも PP を使えばよいというものではない
- ・PP や Blackboard を使えなくてもよい授業はできる

★学生気質について

FD活動と学生気質の関係

- ・教員のみでなく学生の気質にも問題あり
- ・目的意識がない学生をどうするか、ということに取り組む必要がある
- ・卒業さえできればよいと考えている学生が問題である
- ・支払った月謝分を学ぼう、と考える学生は少ない

学生評価と学生気質

- ・学生評価が高い教員は、学生に対する評価が甘い人が多いようである
- ・学生評価が高い教員が、必ずしも良い教員とは限らない

★その他

サマースクールについて

- ・早く発足するべきである
- ・経営学部は来年から発足という話を聞いている
- ・16単位にするならば、それ以上取得したい人の受け皿になる

- ・ 必須科目で落ちてもサマースクールでカバーできるのでよい
- ・ 成績のよい学生は3年で卒業も可能になる
- ・ 卒業まで4年間在学しなければならないとしたら、その分で他の学科科目が履修できる
- ・ 意欲のない学生にも意欲のある学生にもメリットがある

第2回 (8/10~11)

メンバー：秋山紀一、奥山 望、新島恵子、吉村義隆、宗像 勉、
大竹 敢、高千穂安長、石橋哲成 (名簿順、敬称略)

★FD活動について

FD活動の現状

- ・ Plan-Do-See が廻っていない
- ・ Plan と See がないのがいけない
- ・ すべてにおいて、フォローやフィードバックする土壌がない

FD活動の組織

- ・ 大学FD委員会と学部のFD委員会が明確でない
- ・ 第三者評価のためのFD委員会でしかないような気がする
- ・ 何をやるかはあるが、どうやるかが明確でないことが多い
- ・ 司令塔がない (明確でない)

FD活動を阻害する要因

- ・ 教員の意識の問題が大切なので、意識改革が必要である
- ・ 教員の役割が明確になっていないので、FD活動に消極的になる
- ・ 教育と研究の割合は？明確でない
- ・ ディスカッションの成果を反映させるシステムが必要である

★学生によるアンケートについて

- ・ 評価しっぱなしで、それがうまく動いていない
- ・ See の部分を強化し、それを学生にフィードバックするべき

★FD研修について

研修会の運営

- ・ 持続可能性が考えた体制になっていない
- ・ 今後も継続するならば、より合理的な体制にするべきである
- ・ FD委員会と研修センターとがもっと協力しあえるべきである
- ・ 一人で運営するのではなく、応援要員が必要である
- ・ 人が変わっても持続する体制が必要である

研修会の内容

- ・講義内容のわかる人を集めた研修が別途必要である
- ・分野別の研修が必要である
- ・色々なスキル向上のための授業方法の研修が必要である
- ・授業評価を授業に生かすための研修が必要である
- ・全学的に教員の要望を聞いて、新しいプログラムを考える環境が大切である
- ・FDの意識向上のための研修会や討論会を開いてはどうか

★授業改善について

授業改善をする前提

- ・良い授業とは？ということを明確にするべきである（目標が見えない）
- ・どんな卒業生を育てるのが明確にしないと、目標は設定できない
- ・学部の使命が不明瞭である
- ・大学の目標→学部の目標→授業改善という流れが必要である
- ・1年～4年前でのカリキュラムに整合性がない（個々の授業改善以前に必要）
- ・語学、問題解決、知識習得など別の授業方法があるはず

★その他

1年次教育について

- ・学部ごとの一年次教育が必要である
- ・全体が明確でない

第3回 (9/8～9)

メンバー：国見保夫、鈴木シルヴィ、今村 順、大崎正雄、等松春夫、
木下則文（名簿順、敬称略）

★FD活動について

FD活動を活発にするために

- ・教員のプロフェッショナル意識を高める必要がある
- ・FD活動を学生にどう生かせるかが問題である

FD活動を阻害する要因

- ・教育業績が評価されない仕組みがおかしい
- ・文科省対策のためのFD活動は必要であるが、それだけになってはいけない
- ・文科省対策のためのFD活動は、無駄である
- ・FD活動の必要性について納得できる理由がない
- ・教員に危機意識が不足している

★学生によるアンケートについて

- ・アンケート結果（特にコア）の悪い科目を治療（改善）することができない
- ・アンケート結果が悪い教員に対して、FD委員会が改善命令をしてほしい

★学生の気質について

- ・なぜ学ぶのか、目的意識を持たせることが大切である
- ・学生に当事者意識を、どうもたせるか？
- ・社会人学生が入ってくると、動機付けになり、よい影響がある

★FD研修について

研修会の運営

- ・プレゼンテーション研修の継続を望む
- ・継続するためには、体制を強化するべきである
- ・外部から非常勤講師をよんできて複数講師の体制にはできないのか
- ・プレゼンテーション研修は、全教員が受けるべきである

プレゼンテーション研修について

- ・器材、講師の充実を図って、さらに一步踏み込んだ研修にしてほしい
- ・教員が個人的にスキルアップを継続できるような仕組みが必要である

研修会の内容

- ・学生の特質を考えると学部・学科別の研修が必要である
- ・学部・学科というよりも、教科ごとの研修が必要である
- ・グループを構成するための研修が必要

★その他

研修センターについて

- ・研修センターの研修の出席率をあげる必要がある
- ・各種の研修を紹介する役目もしてほしい（現在では不足）
- ・情報発信のセンターの役割として活発になってほしい

第4回（3/2～3）

メンバー：高橋貞雄、草野 進、松香光夫、堀 浩、月岡邦夫、
山田義照、菊池 哲（名簿順、敬称略）

★FD活動について

シラバスについて

- ・シラバスの整備、調整が必要である
- ・シラバス以前に、科目ごとの統一、精査が必要である

- ・大学の目標→学部・学科の目標→科目の概要と考えてシラバスを作成すべきである
- ・資源の共有を図るためにはシラバスが必要
- ・シラバスを途中で変更できないのはおかしい
- ・Blackboard を利用して、現実のシラバスを更新すればよい

FD活動の現状

- ・改革はよいが、書類作りになっていないか？
- ・JABEE、ISO9001、COE、ISO14001 などよいことであるが、書類作成が伴う
- ・書類作成に忙しくても、実質が伴えばよいことである
- ・一部の教員がやりすぎになっていないか
- ・外向けの評価を気にしすぎて、雑用が増えて実質が伴わないのでは？

FD活動を阻害する要因

- ・教員の教育と研究の割合を明確にしてほしい
- ・それは量と質の兼ね合いである
- ・学生の価値観と教員の価値観に乖離がある

★学生によるアンケートについて

- ・フィードバックの仕方に問題がある
- ・アンケートに答えた学生にフィードバックするべきである

★FD研修について

プレゼンテーション研修について

- ・1回限りでなく、スキル向上の機会がほしい

★授業改善について

- ・単位上限があるので、むずかしい
- ・予習、復習の必要性をいながら、その体制が整っていない
- ・自学自習といっても、自習室がないなど、設備面で問題がある

★その他

学部・学科の目標を頻繁に変えすぎるのでは？

- ・学科が変わる周期が早すぎる
- ・卒業した人へのフォローが必要である（説明責任がある）
- ・専門性と帰属意識のどちらを重要視するか？ということである
- ・専門性を重視したとしても説明責任はあるはずである

第5回 (3/9~10)

メンバー：榎本正嗣、杉本和永、岡井紀彦、佐久間裕之、築 正昭
(名簿順、敬称略)

★FD活動について

FD活動を活発にする方法

- ・学生の満足度を高めれば、大学評価にもつながる
- ・お客様意識を高め、CS（満足度）向上を図ることが必要である
- ・現役学生だけでなく、卒業生のCSも大切である

FD活動の現状

- ・FDに関する知識レベル、取り組み方など学部間で温度差がある
- ・FD活動を阻害する要因
- ・FD活動が体系化されていない
- ・FD活動全体を把握して活動している人がいない
- ・最終的には学生の満足につながることを忘れてはいないか

シラバスについて

- ・授業前に締め切って、融通がきかない
- ・Blackboardに現実のものを載せるので、二重になっている
- ・シラバスは、学生に対応して融通性をもたせるべきである
- ・シラバス通りに授業をすることがよいとは限らない

★学生によるアンケートについて

学生評価について

- ・教員と学生とのコミュニケーションの上に成り立つ
- ・教員と学生とは対峙するものではない

授業評価を常時行う仕組み

- ・授業アンケートでは拾えない不満はどうなるのか？
- ・期末でなく、常に意見を言える仕組みが必要である
- ・工学部では投書箱があり、常に意見を吸い上げられる
- ・他学部では、そうした仕組みがない
- ・クレームについては、学生センターが常時対処している

授業評価される人（教員）の問題

- ・教員が、数字やコメントに一喜一憂しているだけで、改善に結びつかない
- ・評価される側の教育が必要である
- ・グラフの見方、評価の受け方などの研修が必要である
- ・教育業績の評価に反映させるのか？そこを明確にするべきである

授業評価をする人(学生)の問題

- ・現役学生、卒業時、卒業生など対象を広げるべきである
- ・卒業時に聞くと具体的な意見が出て、改善案に結びつく
 - コア科目で一度も第一希望が通らなかった
 - シラバスの時間と現実があっていない
- ・学生は評価する能力があるのか？
 - 学生には、評価する能力があるはずである
 - アメリカの場合、学生が評価できるレベルにある
 - アメリカでは、教員が辞めさせられる場合があるほど厳しい
- ・アンケートに対する動機づけが必要である
- ・評価する側の教育が必要である

評価の結果

- ・学生へのフィードバックが必要である
- ・日常的なフィードバックが必要である
- ・日常的に改善されると、学生も真面目に評価する気になる

アンケートの方法

- ・同じ時期にするので、学生にとって面倒なものになっている
- ・テスト前に実施するので、学生は遠慮してしまう
- ・だんだんと形式化されてしまう
- ・期末にするので、本人にはメリットがない(次年度の人のため)
- ・本人にもフィードバックするためには、毎回の授業でやるべき
- ・時間的に短い時間に記入させるので、きちんとした意見を取れない
- ・アンケート項目や実施時期を、教員が自由に選べるとよい
- ・アンケートの目的、実施時期、結果の処理などを最初に示すべきである

授業評価の新しい方法(提案)

- ・グループで話し合わせて評価させると、改善案に結びつく結果を得られる
- ・いつでも記入できるようにフロッピーを準備して、最終日に回収する方法もある

★FD研修について

プレゼンテーション研修

- ・研修会のシリーズ化が必要である
- ・プレゼン研修会の次のステップが必要

その他の研修

- ・新任教員研修会を充実させる必要がある
- ・新任教員研修会にはプレゼンテーションを含めるべき

(6) 実施の成果（14年度からの実施を含む）

定量的にみると昨年度と同レベルの研修を提供したが、結果としてはより一層、FD活動への理解度向上に貢献したと考えることができる。特に今年度は、ディスカッション内容が充実し、これらを通じて教員間に相互理解が深まり、FD活動への意欲も向上した。

さらに、改善への提案に結びつくような具体的な意見が出てきたことも特徴である。平成15年度の報告では、“FDに対する考えが能動的になったが、行動として現れるには至っていない”と報告したが、こうした具体的な提案ということは、大きな進歩と考えることができる。今後は、ここで出された案を平成17年度のFD委員会において、積極的に紹介し、いくつかを取り上げて、実施できることが必要だと思う。

すでに提案された、当該研修会で取り上げた3色カードを各建物の講師控え室に常備するということが現実化された。非常に簡単で細かいことではあるが、こうした地道な改善が、FD活動には大切である。

ディスカッションでの意見にも多く出てきたが、アンケートや話し合いで出てきたことをどう取り上げ、どう処理するかによって、その後の活動が変わってくる。FD委員会として、受講された教員全員にフィードバックし、改善状況を示していくことが必要になってくると思う。4年目を迎えたFD活動が、新たな局面を展開していくためには、フィードバックが不可欠であることを改めて感じている。

(7) 平成16年度 プレゼンテーション研修会参加者一覧

学部	学科	在職者数(人)	平成16年度参加者氏名(敬称略)					※累積数(人)
			第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	
文	人間学科	13	山口 修二		国見 保夫			4
	国際言語文化学科	38		秋山 紀一 奥山 望	鈴木 シルヴァイ	高橋 貞雄	榎本 正嗣	17
	リベラルアーツ学科	20	青木さゆり			草野 進		10
	(教育学科)	6						5
	(英米文学科)	2						2
農	生物資源学科	24	飛田 有支	新島 恵子	今村 順	松香 光夫	杉本 和永	13
	応用生物化学科	18		吉村 義隆		堀 浩		11
工	機械システム学科	12	大久保英敏					5
	知能情報システム学科	17	中村 眞次			月岡 邦夫		5
	メディアネットワーク学科	13		宗像 勉 大竹 敢	大崎 正雄			6
	マネジメントサイエンス学科	14				山田 義照	岡井 紀彦	4
	(機械工学科)	3						0
	(電子工学科)	1						1
	(情報通信工学科)	2						0
(経営工学科)	4						0	
経	国際経営学科	22	所 伸之	高千穂安長	等松 春夫			18
教	教育学科	24		石橋 哲成			佐久間裕之	8
	乳幼児発達学科	10						4
芸	パフォーマンス・アーツ学科	19	小山 正		木下 則文		築 正昭	8
	ビジュアル・アーツ学科	11				菊池 哲		6
計(人)		273	7	8	6	7	5	127

※在職者数は助手以上で、平成16年5月1日現在の専任教員数。

※累積数は当該学科の平成16年5月1日現在在職者の中で、平成14～16年度に研修を受講した専任教員の累積数。

2. 新任教員研修

平成 17 年度採用の新任教員（助手以上）に対し、研修センターが取りまとめ、各部の協力のもと研修会を実施した。この研修会は 14 年度より開始されたもので、3 年目の開催となる。参加者 11 名（欠席者 4 名は後日別日程で開催）で、2 日間の日程で行われた。

日 時：平成 17 年 2 月 22 日（水）～23 日（木）10:00～17:00

場 所：研究・管理棟 210・211 会議室

対 象：平成 17 年度採用の助手以上の新任教員

研修目的：玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・教育方針に対する理解を求め、専任教員としての業務を支障なく遂行できるよう、また新しい時代に向けた学園の発展に貢献できるよう協力を求める。

(1) 研修プログラム内容

【2 月 22 日（火）】

時間	内 容	資 料	担 当
10:00	はじめに 研修内容等説明		研修センター
10:10	玉川学園の組織機構、玉川大学の概要、専任教員の業務（各種運営担当、担任業務、教務指導・学生指導等）、FD活動の現状	・平成 16 年度学生指導要項	教学部長
11:00	休憩		
11:10	玉川大学紹介ビデオ	・VTR	研修センター
11:30	ノーツシステム、Eメールについて	・Notes アカウント申請書 ・Eメールアカウント申請書	情報システムメディアセンター
12:00	昼 食（新任教員自己紹介を含む）		
13:10	研修費と出張（国内外）の手続き等について、教学事務手続要領について、個人研究費、学部予算・執行に付いて、JCB 法人カードと経費口座について	平成 16 年度 ・教学事務手続要領 ・個人研究費使用マニュアル	学務課
13:50	年間授業計画、カリキュラムの概要、学則・規程等（Notes 掲示板の活用、授業、休講、補講、試験、成績等）		授業運営課
14:40	休憩		
14:50	研究者情報システムについて	研究者情報管理システム操作手順書	教務課
15:10	服務等について		人事課
15:40	休憩		
15:50	図書館の利用について（於：図書館）	※3 階学習室	図書館
16:30	校歌紹介	・楽譜	芸術学部教授
16:40	質疑応答		

【2月23日（水）】

時間	内容	資料	担当
10:00	玉川の教育理念と教育方針		学長
10:40	映画「新教育の開拓者—小原國芳」 映画「小原記念館」	VTR	研修センター
11:30	休憩		
11:40	小原記念館見学 (昼食をはさんで)		教育学部長
13:00	個人情報保護方針について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 玉川学園個人情報保護コンプライアンス・プログラムガイドブック ・ 玉川学園における個人情報保護への取り組み ・ 「学校における生徒等に関する個人情報の適正な取扱いを確保するために事業者が講ずべき措置に関する指針」解説 	情報システムメディアセンター長
13:20	環境方針について	・ 環境問題と ISO14001 他	環境保全課長
13:50	休憩		
14:00	グループディスカッション 「今、大学教員に求められているもの」 ・ グループ発表		研修センター
16:30	ディスカッション講評		教学部長
16:50	質疑応答 まとめ		研修センター

(2) 実施の成果（14年度からの実施を含む）

今年度は、実施後のアンケート調査によると、研修内容について参加者全員が充実していたと回答している。とりわけ、グループディスカッションをとおして他の先生方を知る機会ができた、教育理念等玉川大学について知ることができたという意見が多かった。このことから、専任教員としてスムーズな業務遂行ができるよう多くの情報を得ることができ、本研修会の目的は達成できていると評価できる。

また、昨年度のアンケート調査に、今後の改善が必要な事項として「参加者名簿を配布し、全員の自己紹介の時間を設ける必要がある」という意見があった。今年度の研修では参加者名簿の配布を行い、昼食時に自己紹介を行った。このように参加者の意見から改善を行った部分もあるが、一方で以下の事項について対応できていない部分や検討が必要と

思われる事項が残っている。

- ① 外国人教員の参加者に対する説明の方法や配布資料。(平成 15 年度)
- ② 社会人登用者に対しては、シラバス作成に関する事前説明が必要である。(平成 15 年度)
- ③ 着任後 1 ヶ月位経った時点での研修の必要性。(平成 15 年度)
- ④ 研修期間が長い。(平成 16 年度)
- ⑤ グループディスカッションのテーマ (内容) 検討。(平成 16 年度)

平成16年度 玉川大学 FD 委員会委員

委員長	教学部長	後藤昌彦
副委員長	農学部	松香光夫
委員	文学部	藤田裕二
委員	工学部	山田博三
委員	経営学部	菊池重雄
委員	教育学部	長野正
委員	芸術学部	梶原新三
アドバイザー	学術研究所	切田節子
事務担当	教学部	稲葉興己
事務担当	教育調査企画部	齊藤文則

2005 年 5 月発行

発行 玉川大学 FD 委員会

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

tel : 042-739-8802 (教学部教務課)

042-739-8899 (教育調査企画部学校調査課)